



Title	成員カテゴリー化の観点から見た関係構築プロセス：留学生と日本人学生の通時的な日常会話データをもとに
Author(s)	今田, 恵美
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59884">https://hdl.handle.net/11094/59884</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href=" <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> ">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	今 田 恵 美
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学 位 記 番 号	第 25750 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化専攻
学 位 論 文 名	成員カテゴリー化の観点から見た関係構築プロセスー留学生と日本人学生の通時的な日常会話データをもとにー
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 沖田 知子 (副査) 教 授 三牧 陽子 准教授 佐藤 彰

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、外国人留学生と日本人学生が日常会話という相互行為を通して関係を構築していくダイナミックなプロセスを、会話分析の手法を用いて仔細に記述・分析したものである。

近年、グローバル化の流れとともに国内の留学生数は増加の一途を辿っているが、留学生と日本人学生の関係構築に関しては円滑に進んでいない現状がある。このような社会的背景から、これまでに彼らの関係構築阻害要因を解明するため、社会心理学・社会言語学を中心とした分野で研究が進められてきた。しかし、従来の社会心理学による研究では、質問紙調査・面接調査が中心となっており、ダイナミックな関係構築の過程そのものが捉えられていない。

また、談話分析等の手法を用いた社会言語学的研究では、初対面会話を中心とした 1 回限りの実験的会話をデータとして、関係構築の阻害要因を彼らの社会文化的属性の違いに求め、その会話スタイル等の違いを分析するものが多いが、これらには、①関係構築の通時的視点が欠けている、②実際のコミュニケーションの現場を捉えているとはいがたい、③阻害要因にのみ焦点をあて、促進要因には言及されていない、④関係構築の阻害要因を当事者たちの社会的属性に求めるることはステレオタイプの再生産に繋がる危険性をはらむ、といった問題点があった(第 1、2 章)。

そこで、本論文では、留学生と日本人学生が日常会話という相互行為を通して関係を構築していくプロセスを、彼ら自身の指向から読み解いて明らかにすること、関係構築を円滑に進めるための会話の装置を明らかにすることを目的とし、それによって、接触場面会話研究、留学生の日本語会話教育に新たな視点を導入することを目指した。

方法論(第3章)では、調査対象として、実際に同じ大学院研究科に在籍する留学生と日本人学生のグループ(協力者数12名)を選び、彼らにICレコーダーを預けて日常会話を1年間に渡って録音し、そのデータから関係構築のプロセスを分析した。関係構築の概念としてゴッフマン(2002)の「フェイス・ワークの協力」を用いた。「フェイス」とは、他者との相互行為によって社会的に構築される自己イメージとでも言うべきものであり、この「フェイス」をお互いに円滑に保持していく過程こそが関係構築であると捉えたからである。分析には、会話分析と成員カテゴリ化装置(Sacks, 1972)の概念を用いた。会話分析は、日常会話の中に人々が用いている手続きを発見、記述、分析する研究方法である。成員カテゴリ化装置は、彼らが相互行為を通して「何者として」会話に参与しているのかを明らかにするものである。これらの手法により、固定的な社会文化的属性によらず、彼ら自身の指向を会話の中に読み解くことが可能になると考えた。分析箇所として「フェイス・ワークの協力」の中でも、成員カテゴリ化に関する深い「褒めと自己卑下」「遊びとしての対立」という現象を選定した。「褒め」は、相手の全人格を取り上げるではなく、その一侧面(フェイス)を取り上げて高める行為である。いっぽうの「自己卑下」も、自分の一侧面を低める行為である。そこに、彼らが「何者として」関係を構築しようとしているのかが可視化される。「遊びとしての対立」は、「褒め」とは対照的に、相手に挑発的な行為を取ることによって対立を表明する行為である。しかし、それ

が「冗談」「遊び」として行われる限りにおいて、親密な関係作りに貢献する。また、この「遊びとしての対立」の引き金となる「からかい」は、相手をある逸脱したカテゴリーへと配置することで可能になる。以上の現象の一年間に渡る通時的な変化の分析を通して、彼らの関係性の変化(特にその度合いが大きかった4名が中心)の考察を行った。

第4章においては、出会いの初期の集団内での自己紹介を分析した。その結果、さまざまなストラテジー(呼称、エピソード等)を使用し、相互に配慮しながら関係を構築しようとしている彼らの多様な姿を描きだすことができた。

日本人学生は、呼称にニックネームや研究科の役職名を頻繁に使用し、研究科内のエピソードに言及するなど、総じて「研究科メンバー」「仲間」という共有カテゴリー集合を利用していた。一方、留学生は、親しさのマーカーとして呼称を利用している例はあまりなく、言及内容も、出身、学年、専門など最小限の情報開示に留まるものが多く、「外国人留学生」として自らをカテゴリー化することが多かった。日本人学生も、留学生の発話を引き出そうとする、発話訂正をするなど「日本人学生-留学生」という対カテゴリー集合を利用した振る舞いが見られた。ただし、留学生の中には、留学生カテゴリーよりも自らの個性に焦点をあてた自己紹介をする者もあった。

また、日本人学生と留学生の自己紹介の双方に笑いを交えた自己卑下や自慢回避の傾向が見られた。日本人学生は自己紹介者全員が、自己卑下的な情報開示を積極的に行っており、聞き手にも笑いで受け止められていた。このことは、自己卑下が親しみやすさを示す冗談として機能することを表している。一方、留学生には積極的な自己卑下的情報開示はあまりなかったが、質問の答えとして自慢を回避する傾向が見られた。さらに特技や趣味についての質問によって、褒めのリソースを得ようとするなど、グループのメンバーが、他者を褒め、自分は謙遜するフェイス・ワークにおける協力を歩いていたことが明らかとなり、これらの点を通時に分析する必要性が示唆された。

第5章では、「褒め」と「自己卑下」に焦点を当て、それを通して行われる通時の成員カテゴリー化の様相を分析した。褒めをめぐる成員カテゴリー化では、通年に「授業」「ゼミ」等、彼らが「大学院生仲間」であるという「共-成員性(串田2001)」を指向した話題選択が行われ、褒めの対象も「授業での活躍」など、大学院生としてのフェイスを高める側面に焦点があつた。

しかし、時間の経過によって、その「大学院生仲間」というカテゴリーは「〇〇という分野に詳しい人」のように下位分類化されていく、通時に異なるカテゴリーを用いることによって、相手への知識や理解の深化を互いに可視化し、関係性を変容させている様相が見られた。

自己卑下をめぐるカテゴリー化では、時間の経過に従って、相手の自己卑下への反応に変化が大きく現れるようになった。初期には、相手の自己卑下に対して、聞き手が自分にも同じような側面があることを開示することによって、「共-成員性」を指向する様相が伺えたが、徐々に相手の自己卑下に対して、一部肯定する様相が見られるようになった。ただし、それには、相手の良い面を伝えることも同時に流れ、相手のフェイスへの配慮が見られた。つまり、自己卑下に対して単に否定や肯定を行うのではなく、相手の良い面も悪い面も理解しているということが可視化されていた。さらに時間が経過すると、笑いを伴った冗談として、自分でなく、他のメンバーも巻き込んで自己卑下を行おうとする様相や、メンバーがそのような自己卑下的な「共-成員」からの離脱を図ろうとする様相が観察された。このカテゴリーの対立は「遊び」として行われており、すでに彼らに「仲間」であるという「共-成員性」があるからこそ、カテゴリーの分離が可能になっていたと考えられる。また、時間の経過に従って、「大学院生」という社会的な属性とは無関係の、メンバーの個性に焦点化した話題も見られるようになった。

第6章では、「遊びとしての対立」をめぐる成員カテゴリー化を中心に、まず、冗談関係構築過程の一端を明らかにした。まだ日本語による冗談に熟達していない留学生の冗談の最初のステップは、他のメンバーの冗談の形式をモデル、足場として利用しながら行われたものだった。また、過去の発話時点での意味とコンテキストを含みこんだ言語形式を再利用するという“tying practice”を利用しての冗談も行われていた。さらに、攻撃と解釈される危険性をふくむからかいが行われたときに、それを「冗談」として受け手や他のメンバーが扱う工夫も行われていた。

からかいの対象となる事象は、日々積み重ねられる会話の中で、本人が自己申告した自己卑下的なものや、既出の会話で「冗談」として成功した経験があるものの中から選択され、フェイス侵害の危険を回避していた。そして、これらからかいの対象となっていたのは、彼らの固定的な社会的属性のカテゴリー付随活動とは外れた活動であることがわかった。若い女性の「おっさん」らしさ、留学生の「日本人」らしさを指摘してからかうという行為は、その属性を越えたところにあるその人の個性そのものを知っており、そこに親しみを感じていることを可視化する。彼らにとって、「日本人」「タイ人」という国籍カテゴリーも、可動性の、他のカテゴリーと並んで称されるような、いわばひとつの利用可能な側面にすぎないことがここで示された。彼らは社会的属性から逸脱した部分を「個性」として扱い、その「個性」についての知識を共有し、それを話題として冗談が言い合えることを示すことによって、その集団の「仲間」であることを可視化していた。

以上のように、留学生と日本人学生の日常会話においては「留学生」「日本人学生」であることが常にレリヴァントになっているわけではないことを示した。出会いの初期には、既存の利用可能な「共-成員性」(例:大学院生同士)

を用いた褒め、自己卑下を行い、時間の経過に従って相手への知識・理解を表示するカテゴリー化を行うことによってその「共-成員性」を更新しているとわかった。また、経験を共有する中で知り得た、相手の社会的属性から逸脱した部分をからかうことによって、その個性についての知識を共有する「仲間」であることを可視化していた。

これらの知見は、実験室的、一時的な会話データを社会的属性の違いによって分析するのではなく、通時の日常会話に彼ら自身の指向を読み解くことによって可能になったことである。今後、接触場面研究にこれらの視点を導入する有用性が示唆されたと言えよう。また、本論文は「共-成員性」の可視化手続きとその更新について、仔細な連鎖構造を含めて明らかにしており、このような点を留学生の日本語の会話教育に応用することも可能である。

本論文は、留学生と日本人学生の社会的属性によらない不变的な関係構築の装置を明らかにしたものである。従来行われてきた対照研究と、会話分析が目指す不变性をもった構造を見出していくという研究は、どちらも接触場面研究、日本語会話教育等において、欠かせない側面と言える。今後、引き続き円滑な人間関係構築のための会話の装置を明らかにし、隣接する研究分野との接続をはかりつつ、その応用を考える必要があるだろう。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、留学生と日本人学生の日常会話の通時的数据から、関係構築のダイナミックなプロセスを成員力カテゴリー化の観点から分析、考察したものである。従来の横断的、実験室的な研究では見過ごされてきた、個別具体的な状況を積み重ねていく様を、固定的属性によらず会話参与者の発話ごとに更新され変化していく「成員カテゴリー化装置」(Sacks)の概念を用いて、明らかにしようとしている。

同一研究科に属する留学生と日本人学生からなるグループの1年間にわたる自然会話データを収集し会話分析することにより、従来の接触場面における留学生・日本人学生といった対カテゴリーを超える新たな共通関係性(共-成員性)を指向する様を見出している。とりわけ、成員カテゴリー化に関連深い「自己紹介」「褒めと自己卑下」「遊びとしての対立」に焦点をあて、彼らが「何者として」関係を構築しようとしているのかを可視化している。さらには、その関係構築のプロセスを丹念に追うことにより、既存の「共-成員性」を利用し、更新していく相互行為の連鎖を通時に分析して、成員カテゴリー化の仕組みと働きを解明している。時間経過の中で、既存のカテゴリーがさらに下位分類されていく、異なるカテゴリーを用いることにより、相手への知識や理解の深化を互いに可視化して、関係性を変容させていくなど、ここで抽出されたダイナミズムの解明は特筆に値する。

このように、円滑な関係構築のための会話の装置を詳細な会話分析から明らかにし、さらに特定の文脈に依存しない「共-成員性」可視化と更新の手続きの解明にまで考察を深めた功績は大である。また、本研究が留学生と日本人学生の親密な関係構築が困難な現状を研究動機としていることを考えると、その成果として見出された「共-成員性」の可視化プロセスは、関係者にとって示唆に富む社会的な価値も有している。この観点から、本論文は、日本語教育と会話分析を繋ごうとする新しい試みであると位置づけられよう。日常会話を円滑にすすめるためには、「共-成員性」を見出すことができる話題選択などが有効と考えられ、日本語教育の分野においても意義深い方向性を実証したものとなっている。欲を言えば、この点についてもう少し踏み込んで論じてみてもよかったですと思われるが、これら研究成果を生かした教科書を作成中であることからも、今後の貢献は大いに期待されるものである。

以上のように、本論文は博士(言語文化学)の学位論文として価値あるものとして認める。